8/7 使徒の働き 17 章 16-34 節「神は一人の方により」

小池宏明牧師

パウロたちは第二回目の伝道旅行の中で、度々ユダヤ人の迫害を受けた。今回は、パウロが一人で、古都アテネに逃げて来たことから始まるアテネ伝道の一コマである。パウロはアテネの町を歩きながら大きなショックを受ける。町が偶像で溢れていたからだ。パウロは、「**心に憤りを覚えた**」(16 節)。これは単なる怒りだけではなく、心の深いところに湧き上がってくる悲しみや苦しみも含めた衝動である。後から、シラスとテモテが来ることなっていたが、パウロは合流するまでの間にも、アテネ市民に福音を語り続けた。

＊何とか接点を求めて

新しい話を好むアテネ市民は、パウロが伝えていることをもっと聞きたいと願い、アレオパゴスで評議会を開くことにした。そこで、パウロは、アテネの人々を「宗教心があつい方々だ」と言い表し、アテネの人々を認めて、心を開かせて、真実の神様を証ししようとした。私たちは、偶像に溢れた日本各地を見て、どのように感じているだろうか？私たちも伝えたい相手のことをよく知り、どのように話せば福音が伝わりやすいのかを、よく祈り求めていきたい。パウロは、天地万物と私たち人間の創造者としての神様を紹介して、その神様を宮に安置したり、金や銀などの材料で作ったりする偶像と同じはずがない、と明言した。パウロは人々が受け入れ易い創造者としての神という視点から話し始めた。

＊愛と信仰と忍耐をもって

続いて、パウロは、救い主イエス・キリストのよみがえりの事実を語った。ところが、パウロの話を聞いたアテネの人々の反応は良くなかった。パウロが語る死者の復活についてあざ笑う者もいた。それでも、主なる神様は、一人でも二人でも救い出される人を備えてくださり、励ましと慰めを与えて下さった。パウロがアテネに立ち寄った時（AD50 年前後）には、ほとんどの人がイエス様を信じなかったが、紀元後 313 年にローマ帝国がキリスト教を公認したことをきっかけに、各地でキリストが宣べ伝えられて、今や、ギリシャの首都アテネでは、キリスト教の一派であるギリシャ正教会が主流になっている。日本でも、福音を聞いて反対する人や、無関心な人もいるかもしれない。しかし、主なる神様は、必ず救われる人を起こして下さる。もしかしたら、かなり後になって、自分たちの知らない所で、救われる人々が起きているかもしれない。私たちは今、この国に生かされているクリスチャンとして、この国に関心を持ち、愛と信仰、忍耐をもって、救い主イエス・キリストを紹介して生きよう。